

医療関係者向け研修会を開催して見えてきたこと

神屋 郁子（社会福祉法人 京都ライトハウス 鳥居寮）
 野崎 正和（社会福祉法人 京都ライトハウス 鳥居寮）
 牧 和義（社会福祉法人 京都ライトハウス 鳥居寮）
 岩井 授身（社会福祉法人 京都ライトハウス
 京都市北部障害者地域生活支援センターほくほく）
 鈴木佳代子（社団法人 京都府視覚障害者協会）
 小永吉彩美（社団法人 京都府視覚障害者協会）

【目的】

見えない・見えにくい状態になった時に、まず医療機関を受診される。この見えにくい状態になった時に必要な支援や情報が素早く伝えられることが大切である。人の生活は、医療だけで完結することはできず、福祉関係者との連携は患者に対する支援に欠くことができないものであると考えている。そこで、医療関係者と福祉とが「つながる」ことが大切である。そのため、医療関係者に福祉施設で行っている相談事業、制度活用や視覚障害リハビリテーションを知っていただき、情報提供できる機会をつくること、医療関係者と顔の見える関係作りとを目的とし、2008年度から年に一度研修会を開催することにした。この研修会を通して、お互いに学び・交流し、福祉と医療、医療と患者、患者と福祉とが「つながる」ことをも目的としている。

なお、研修会は京都ライトハウスと京都府視覚障害者協会と共催して行っている。また、2008年度から京都市、2009年度から京都府眼科医会から後援をいただいて開催している。

【研修会概要】

定員を30名として参加しやすいと思われる日曜日（10時～16時）に京都ライトハウスにて開催。研修会終了後に、希望者にライトハウス館内見学を実施している。昼食・資料代を含め3000円の参加費を徴収している。資料代

には、当日使用の資料以外に、ロービジョン体験できるシミュレーションキットも含まれており、医院や家族の説明時に使用できるようにしている。

後日、研修会終了後に、研修会当日のまとめたものを参加者へ送付若しくはメールをしている。

【広報】

広報は京都府眼科医会の会報（約410名の眼科医が加盟）発送時にチラシを同封してもらうようにしている。他に、京都ライトハウスホームページの掲載、関西の大学病院、視能訓練士、京都市内の看護学校、前年度参加者等（約100箇所）へもチラシを送付。

【参加者】

毎年、異なる医師が1名は参加され、視能訓練士、看護師を中心とした参加がみられる。

また、複数回参加される方も少数ではあるが

表1 参加者内訳

1) 職種別						
	医師	視能訓練士	看護師	検査員	その他	合計
2008年度	2	15	10	2	2	31
2009年度	1	15	9	3	2	30
2010年度	1	9	5	2	3	20
* その他 眼科事務員、ケアマネージャーなど						
2) 複数回参加者						
	2回	3回				
人数	3	4				

みられる。複数回参加されている方は、京都市から離れた地域の方である。そして、研修会などから何らかの「つながり」ができている方が、更なる自己研鑽を目的に参加されている。

【研修会内容】

毎年、①視覚障害体験、②視覚障害当事者の話、③福祉制度の紹介・活用講義、④グループ交流会の4つを軸としてプログラムを決めている。また、プログラムを実施するうえで視覚障害リハビリテーション支援員、視覚障害生活相談員、当事者と役割を分けて行っている。何度か参加される方も居られるので、アンケートの意見を参考にして検討している。そこで、食事の体験は毎年行っているが、全員で行ったり、ペアになり食事の説明役も体験したり、お弁当で行ったり、給食形式で行ったり、アイマスクやロービジョン体験で行ったりと様々である。

以下、各年度のプログラム紹介。

2008年度

見えない・見えにくい人を理解するために

(視覚障害リハビリテーションについて説明)

体験(手引き、拡大読書器や罫プレートを活用した書字、日常生活動作の3つを20分ずつで交代する)

昼食体験(全員お弁当をアイマスクで実施)

視覚障害当事者の思い(3名の当事者の話)

医療から福祉への架け橋(福祉制度講義)

ワークショップ(グループ交流会)

2009年度

視覚障害リハビリテーションの実際

(当事者がリハビリテーションを受けて変わったことなど講義)

体験分科会(手引き、点字の活用、音声によるパソコン操作の3つから選択してどれかを体験する。手引き以外は当事者が講師となった)

昼食体験(二人1組お弁当で、説明役とアイマスク体験)

眼科医療現場でできるこころの支援(臨床心理士の資格を持つ当事者の講義)

患者さんに喜ばれる医療と福祉のつながり(福

祉制度講義)

分科会(こころの支援をより深く話そう、患者さんが使える制度、京都ライトハウスのロービジョン相談の3つから選択し交流会を兼ねて現場での課題など話す)

2010年度

手引き体験

パネルディスカッション「医療から福祉そして今」(視能訓練士、リハビリテーション支援員、当事者の3者がパネリストとなり、それぞれの立場からつながっていく必要性について話す)

食事体験(二人1組で給食形式で説明とアイマスクかロービジョン体験選択)

視覚障害リハビリテーションとは(講義)

知っていますか?患者さんのための福祉制度(講義)

ミニ交流会

2011年度(予定)

わたしのロービジョンケア史～北部眼科医からの実践報告～(眼科医からの講演)

視覚障害児児童デイサービス あいあい教室の実践(視覚障害児療育について講義)

手引き体験

食事体験

ワークショップ(交流会)

【評価】

研修会終了後にアンケートの記入をお願いしている。多くのコメントをもらい、研修の評としている。その結果「好評」であるという判断をしている。特に、食事体験や当事者の話は評価が高い。また、参加者が交流できる機会は、同じように悩み・考えながら働いている仲間がいることが分かる場となり医療関係者同士もつながることを望んでいることが分かった。そして何より、医療現場では、「視覚障害者」に直接いろいろと話をするきっかけや時間がなく、話ができる・聞く機会を望んでいるということが分かった。

以下は、実際にアンケートに記入されていた参加者のコメントである。

○視覚障害当事者の方の意見も交えながら、

医療と福祉につながりがあることの有用性を実感することができました（視能訓練士）

○リハビリの実際を知ることができた。患者に紹介したい（視能訓練士）

○どちらでも声かけるタイミングに悩んでいることが分かった（視能訓練士）

○いろいろな医療現場の方と話せて良かったです（検査員）

○今まで身体障害の基準があやふやだった。講義はためになりました（看護師）

○ライトハウスは敷居が高いというイメージがありましたが、思っていたより、いろいろな方がいろいろな方法で利用できる施設であり、当院の患者さまにも利用していただけるよう、声かけをしていきたいと思いました。（看護師）

○視覚障害者の方と同様、私たち眼科で働く者も、仲間が必要です。地域ではロービジョンに関する視能訓練士が少なく、心細いですが、ここに来て、刺激と元気をもらって帰ります。（視能訓練士）

○今年も参加して、学ぶことができました。制度のことなど何度聞いても新鮮な気がします。（視能訓練士）

○患者さんの立場から考えたことを聞いて良かったです。次回は、もっと質問できるように患者さんと接して調べて勉強したいと思います。（視能訓練士）

○福祉の方が手を広げて待っておられるとは思ってもみませんでした。（視能訓練士）

○リハビリといえば生活していくためのことばかりに気をとられていましたが、仲間がいるというメンタル的なことがとても大事なのだと知りました。（看護師）

○福祉の方々との連携は業務の中で、おざなりになりがちですが、何ができるのかということを知っておき活かしていきたいと思います。（看護師）

○診療の場面では聞くことのできない視覚障害者の心の声をわかりやすく、かつ冷静に論理的に話していただき良かった。障害者であるというステレオタイプにとらわれず、ニーズに応える形でのサポートができるように気をつけた。（眼科医）

○おかずの位置説明に時間がかかり過ぎてしまいました。（視能訓練士）

○自分の語彙のなさに愕然としました。説明は、難しいです。普段から「あれ」「それ」と言わずに、もっと語彙を増やしていきたいです。（検査員）

【成果】

当事者の話を聞けることや、視覚障害体験をすることで日々の業務の中での声かけのきっかけを知っていただけていると考える。

そして、顔の見えるつながりができることにより、医療現場からの相談件数が増え早期に相談対応できることができてきている。実際に、メールや電話での相談が増えてきた。研修会の内容を院内で参加できなかった職員向けに行ったことなど報告を受けている。

また、相談会や患者さん向けの講習会などを院内で開催できるような関係作りもできてきた。このようにつながることができてきたのは、紹介する患者さんのその後のことについて知ると安心して紹介できるからだと思われる。

他に研修会を開催することで気がついたことは、患者さんから紹介されたことを報告してもらうことが医療関係者にとって喜びにもつながることが分かった。そこで、患者さんから医療関係者に直接声をかけてもらうよう働きかけをするようになった。

三者でのつながりというのがとても大切だと感じる。

【医療現場にて】

つながってきた医療現場にて患者向けに一緒に取り組むことができないかお互いに模索し、講習会や相談会を開催している。実際に行った講習会・相談会を紹介する。

1) 講習会

場所 独立行政法人舞鶴医療センター
眼科外来

日程 1回目 2010年8月24日
2回目 2011年10月18日

時間 13時～15時

内容 1回目 日常生活の工夫

2 回目 ミニ講演と白杖について
 広報 院内掲示と個別の呼びかけ
 (視能訓練士による)
 対象者 患者さんとその家族
 参加者 各回5~6名
 主催 京都ライトハウス 鳥居寮

2) 相談会

場所 市立福知山市民病院
 時間 12時~15時
 内容 用具展示と紹介、個別生活相談、講演
 対象者 市民病院の患者と家族、身体障害者
 手帳取得最近5年以内の方(福知
 山市が年に1度だけ案内送付)
 参加者 40名程度(講演もあったため)
 主催 市立福知山市民病院眼科外来
 協力 京都ライトハウス
 京都府視覚障害者協会
 紫野福祉センター

【課題】

研修会を実施することで、医療現場が求めていることが少しずつみえてきた。そして、医療関係者にも情報がとどいていないというのも分かってきた。視覚障害者への啓発も大事だが、関る人がつながっていくためにも、継続は必要であると考え。その際、来年も来たいと思われるような内容で取り組むことが必要である。また、つながりができてきたところもでてきた

ので、その医療機関との連携を深めた報告などもこれから行い、多くの地域の方に知っていただく機会をもつことが望まれるのではないかと考える。

【まとめ】

3年間研修会を開催し、医療現場からもこのような研修機会を望まれていることが分かった。そして、日々悩んでいることが自分だけでなく、他の職場の方も感じていることなどが分かる機会にもなっており、福祉と医療とを「つなぐ」研修会となっている。

いろいろな研修会・啓発事業は行っている。が、この医療関係者向け研修会から、当施設等では、行政向け研修会や福祉関係者向け研修会と対象者を絞った形で研修を行うようになった。それは、対象者によって知りたいことが違い、福祉側も伝えたいことが違うからだ。全てで違うわけではなく、共通する部分もあるが、異なる部分に目を向け対象者別に行うことで参加者のニーズを拾って研修会が開催できていると思う。対象を絞ることで参加者を集めることに苦慮することもあるが、それぞれの特徴を活かしプログラム立てすることで定着しつつある。視覚障害を啓発し共に支える人を増やすためにも、このような事業は有効なものであると考える。